

偽りの自己からの回復

—子ども虐待についての文献レビュー—

Recovery from pseudo-self

—Literature review about child abuse—

村方多鶴子^{※1}

Tazuko Murakata^{※1}

キーワード：子ども虐待，世代間伝達，真の自己，偽りの自己

Child abuse, Transgenerational transmission, Real-self, Pseudo-self

I. 緒言

1962年に、アメリカでケンプ (C. H. Kempe) がbattered child syndrome¹⁾の概念を発表し、日本では1971年に「小児の虐待—Battered child syndrome」²⁾が発表された。しかし、この当時、子ども虐待に取り組んでいたのは、小児科医を中心とする一部の医師たちだけであった。その後コインロッカー嬰兒死体遺棄事件が多発したため、子ども虐待の全国的調査³⁾が行われるようになり、その実数が明らかになっていった。1990年ごろには子ども虐待に関する研究が幅広く行われ⁴⁾⁻¹⁰⁾、マスコミでも子ども虐待を取り上げる機会が多くなり、子ども虐待の関心が世間にも広まっていった。

幼い頃虐待を受けると、身体的な傷にとどまらず心の傷として残り、大人になっても様々な影響を及ぼす¹¹⁾と言われている。そのひとつに自我形成の歪みがあり、自分の感情を抑圧したまま大人になると「偽りの自己」が形成され¹²⁾、それが影響して自分の子どもにも同じ虐待を繰り返すことが明らかになっており、その割合は30%程度¹³⁾と言われている。しかし、逆境の中に育っても、サポートしてくれる人がいると虐待を防ぐことができる¹⁴⁾とスティール (Steel, B. F.) は述べている。また、ハンター (Hunter, R. S.) の研究によれば、自らの虐待について「語る」ことができ

る人は、虐待を繰り返さない¹⁵⁾ということが明らかになっている。つまり、周りに信頼できる人がいて、自分の感情を素直に表現することができれば、虐待を繰り返さなくてもすむと考えられる。

しかし、成長していく過程で信頼できる人に出会わなかった人もいる。その場合、偽りの自己が形成され、生き辛さを感じたまま生きざるを得ない。そこで、偽りの自己として成長した人に看護師が援助することで、自分らしく生きることができるようになればと考えた。ハーマン (Juduth Lewis Herman) は、心的外傷を受けた人が回復していく方法として、安全な集団の中でグループワークを行い、自分の体験を語り、他者との新しい結びつきを取り戻すことで自分らしい生き方を獲得することができる¹⁶⁾と述べている。日本でも斎藤⁹⁾がその方法を取り入れ、虐待を受けた人に対して治療を行っているが、まだ一部でしか行われていない。その理由として、今まで虐待を行う親は加害者とみなされ、治療の対象とは考えられていなかったために、予防的治療には力をいれてこなかったことが挙げられる。しかし、親を責めているだけでは何の解決にもならないということが明らかになり、親をも治療の対象と見なすようになってきた。最近では、保健所などで、虐待を起こす恐れのある母親を対象としたグループでの治療が行われ始めている。

※1 宮崎医科大学医学部看護学科 臨床看護学講座 Miyazaki Medical College, School of Nursing

そこで本研究では、研究枠組み構築のために文献の整理を目的として、「偽りの自己」がどのように形成されるのか、また、「偽りの自己」がどのようにして回復し、「真の自己」を取り戻すことができるのか、その過程を文献を元に明らかにする。

II. 研究方法

1. 研究時期

1999年4月～2000年12月

2. 研究方法

1990年以降に出版された文献の中で、日本で第一線で虐待を受けた子ども（以下、被虐待児と現す）の治療を行っている西澤、トラウマ（心的外傷）の研究を行っているJ.L.ハーマンや、家族病理の研究や治療の第一人者である斎藤の文献を主に取り上げ、文献研究を行った。

3. 研究内容

偽りの自己に関係ある、子ども虐待の情緒的影響、世代間伝達の仕組み、世代間伝達防止への対応を明らかにした。

4. 用語の定義

1) 子ども虐待

保護者（親権を行うもの、未成年後見人その他の者で、児童を現に監護する者）がその監護する児童（18歳に満たない者）に対し、身体的虐待、性的虐待、ネグレクト（neglect）、心理的虐待などの行為をすることをいう¹⁷⁾。

2) 真の自己（real self）

真の自己とは、自分の感情に正直で、生き生きとして現実感のある自己のことである。

真の自己は以下のようにして形成される。エリクソン（Erik H. Erikson）は、「乳児は、母親的役割を持つ他者に生理的欲求を繰り返し満たしてもらふことで、快の状態になることを体験するだけでなく、母親から自分は一個人として信頼されているという確信を得ることで、子どもの心の中には基本的信頼感が育ってい

く。」¹⁸⁾と述べている。そしてアイデンティティを確立していくためには真の承認、つまり、ありのままを認められることが重要だとレイン（R. D. Laing）¹⁹⁾は述べている。人は無力な状態で生まれてきても、親から愛され大切にされた体験をもとに、基本的信頼感や自尊感情が形成されるのである。（ここで言う親とは生物学的な親ではなく、その子にとって大切な存在である親的役割の人を意味する。）

ウィニコット（Donald W. Winnicott）は本当の自己だけが実存感や現実感をもつ²⁰⁾と考え、レインは＜真正＞であるということは、自分自身に対して真実であり、自分があるところのものであり、＜本物＞であること²⁰⁾と述べている。ここで言う「本当の自己」、「＜真正＞であること」が「真の自己」と呼ばれるものと考ええる。

3) 偽りの自己（pseudo self）

偽りの自己とは、自分の素直な感情を抑圧して、相手の期待に迎合する自己のことである。

III. 結果及び考察

研究枠組み構築のために文献の整理を行った結果、子ども虐待により情緒的にどのような影響を受けるのか、なぜ虐待が次の世代に繰り返されるのか、子ども虐待を防ぐにはどうしたらいいのかという項目が整理できた。

1. 子ども虐待の情緒的影響

村瀬は、被虐待児は、発達過程において適切な親子関係を保てなかったために、①自分も他者も信じられない、②自己抑制力が弱く、衝動コントロールが拙い、③体験を自分から切り離す傾向にある、④相手を怒らせるような行為に出る、⑤人格の乖離状態をきたすなどの精神発達上の問題が生じる²¹⁾と述べている。郭は、虐待を受けると、虐待されている期間のみでなく、その後の人格の発達にも影響を与える²²⁾と考えている。また、西澤は、虐待が及ぼす情緒的影響として心的外傷後ストレス障害（PTSD）、対人関係の障害、攻撃性、自己概念の障害、解離性障害、その他の心理

の影響として、偽成熟性 (pseudo-maturity)、食べ物への強い固執、境界性人格障害²³⁾を挙げている。

偽りの自己の形成という視点から考えると、乳幼児期に虐待を受けた場合、基本的信頼感が育たない、自己評価が低く自己概念が歪む、攻撃性・衝動性が高い、心に深い傷を負うという影響を受けると考えられる。そこで、それらの発生機序を明らかにする。

1) 基本的信頼感の欠如

子ども虐待の場合、長期にわたり繰り返し裏切られるような体験をすることが多い。西澤は、最も愛してくれるはずの親が攻撃を加えることで、基本的信頼感を中心とする対人関係が大きく障害される¹⁾と述べているように、親に対する基本的信頼感が育っていなければ、他人を信じていくことができない。そのために、周りの人々と適切な距離を保ちながら付き合うことができなくなる。

2) 低い自己評価

子どもは、親から承認されることにより、自己を確立していく。しかし、被虐待児は、自分を受け入れられた体験が少ない。西澤は虐待を受けて育った子どもは、虐待行為の原因が自分にあると認知する傾向があり、「自分は悪い子でダメな存在だ」という認知を持ってしまう¹⁾と述べている。親に対する基本的信頼感がない上に、罪悪感を抱いたまま成長する子どもは、自己評価が低く自分に自信が持てなくなる。

3) 自己概念の歪み

信田²⁴⁾は、「よい子」とは大人にとって都合のよい子と捉え、三池²⁵⁾は、周囲の意見や雰囲気を感じ取り協調し、自己抑制して自らを出さずに生きている子ども達を「よい子」と定義している。親が子どもを支配したり、不適切な育児を行ったりすると、子どもには基本的信頼感が育たず、自我が弱くなる。そして、子どもは「見捨てられ不安」(自分が親から捨てられてしまうのではないかという不安)から親にしがみついため、自分の素直な感情を抑圧せざるを得ず、懸命に親の期待に応えようとする。

こうして親が喜ぶような「いい子」を演じてしまうようになる。西澤¹⁾は自分の周りにいる人の感情や欲求を非常に敏感に感じ取り、反応することを偽成熟性と呼び、「良い子」と評価されることが多いと述べている。子どもがそのような反応を示すのは、それほど「親に愛されたい、認められたい」という思いが強いからである。しかし、親の期待通りになり、周りからも賞賛を得るような結果になったとしても、本当に自分の望む生き方とは異なるため、空虚感や無力感を感じてしまう。

ミラー (Alice Miller) は、「両親の欲求に順応していると、…偽りの自己と呼ばれているものが出来上がってくる。」²⁶⁾と考へ、ウィットフィールド (Charles L. Whitfield) は「偽りの自己は隠れ蓑であり、他人がそうあって欲しいと思うものに焦点を当て、過度に適合する。」²⁷⁾と述べている。つまり、虐待を受けると、子どもは見捨てられ不安から「良い子」を演じるようになり、虐待が長期にわたると自己概念を歪めてしまい、偽りの自己が出来上がってしまう。

4) 高い攻撃性・衝動性

虐待を受けると、子どもは痛みの感覚や怒りなどの攻撃的感情を持つが、それを表現することは危険なため、抑圧せざるを得ない。更に、そういう気持ちを感じるのが苦痛であるため、感情を鈍磨させていく。しかし、その感情は消えてしまうわけではなく、無意識の中で存在し続ける。そして、表現できないために余計にその攻撃性は大きくなる。

一方、被虐待児は、親との間で過去に身につけた虐待的人間関係を再現する「虐待関係の反復傾向 (replication)」がある²³⁾と西澤は述べている。親から共感された経験が少なく、相手の立場に立って考えるという体験を学んでいないため、怒りが強まった時に自分で怒りをコントロールできないからである。また、前述したように、攻撃性を抑圧していたため、怒りが限界に達した時には、より破壊的となって現れやすい。

5) 心的外傷後ストレス障害 (post traumatic stress disorder : PTSD)

PTSDとは、過酷なストレスに対する反応として生じる精神的な障害で、強い恐怖、驚愕、絶望などの心理的状态を呈するものである。子ども虐待は、密室の中で、長期にわたり何度も繰り返されることが多いため、誰にも気づかれないまま、心的外傷(トラウマ)になりやすい。

2. 子ども虐待の世代間伝達の仕組み

自分が親から受けた虐待と同じことを自分の子どもに繰り返すことを、「虐待の世代間伝達」(transgeneration transmission)と呼び、虐待を生じる家族の特徴の一つ²⁸⁾と考えられている。真の自己を抑圧し、その矛盾に気づかないで大人になった人も、自分が親となり子育てをする段階になると、「自分と子どもとの関係」を通して「自分と親との関係」を見つめ直さざるをえない。すると、今まで抑圧してきた感情に直面させられ混乱する。そして、大人になっても絶対的存在である親に逆らえないために、自分より弱い「自分の子ども」に抑圧していた感情をおつけることになる。

虐待の世代間伝達の仕組みは、学習^{22, 29)}、虐待者への同一化 (identification with aggressor)²⁹⁾⁻³²⁾と復讐^{29, 33, 34)}、役割逆転 (role reversal)^{13, 35)}により起こると言われている。ここでは、深層心理学的視点から、「偽りの自己」と関係が深い攻撃者との同一化と復讐、役割逆転がどのように起こるかを明らかにする。

1) 攻撃者との同一化と復讐

虐待をうけると、自分に自信が持たなくなり、自己評価が低くなる反面、攻撃性・衝動性が高くなる。そのため、かつて虐待を受けた親は、「自分の悪いイメージ」を「自分の子ども」に投影 (projection) し、「自分」を「虐待した親」と同一化するという防衛機制が働く。西澤²⁹⁾は、自分に攻撃を加えた「強い」存在である親と自分を重ね合わせることによって、「弱い無力な自分」を否定し、それを万能感で置き換えると述べている。このように、力を誇示す

ことで辛い記憶を抹殺し、傷ついた自尊心を修復できる。こうして、親との間で身につけた虐待関係を繰り返してしまう。

2) 役割逆転

両親に依存している乳幼児期に親から拒まれ、その上暴力にさらされた子は、基本的信頼感が育っていないため、慢性愛情飢餓状態にいる⁴⁾と言われている。そのため、そのまま大人になった人は強迫に取り付かれ、子どもの時に手に入れることができなかった愛情や保護を、両親の代役となる「自分の子ども」に求めるようになる²⁶⁾と考えられている。本当なら、親が子どもの欲求を満たすという基本的な役割関係が逆転し、子どもの方が偽成熟性を発達させ、親の欲求を満足させるという逆転した役割関係になってしまう¹³⁾のである。

3. 世代間伝達を防ぐには

カウフマン (Joan Kaufman)³⁶⁾は、虐待の世代間伝達に関する従来の方法を概観し、30±5%の割合で世代間伝達が行われていると結論を出している。30%前後という数字は、我が国においても信頼できると西澤¹³⁾は述べている。同じように虐待を受けても、次世代に伝達する場合と、しない場合があるのはなぜであろうか。

スティール¹⁴⁾は、他人に対する信頼の有無が虐待の世代間伝達に影響していると指摘している。たとえ両親から虐待を受けて成長しても、他にサポートしてくれる人がいる人は、支えてくれる人がいなかった人よりも悪循環を断つ可能性が高いという結果である。更に、ハンター¹⁵⁾は、自らの虐待について語るができるか否かが、虐待を繰り返すかどうかの大きな別れ目になっていると述べている。また、ハーマン³⁷⁾は、秘密を明らかにすることで回復につながると考えている。つまり、虐待を受けたとしても周りに支えてくれる人がいたり、早い時期に治療を受けると虐待による情緒的影響は少ないが、周りに恵まれず、治療を受ける機会もなく大人になると、偽りの自己として生き、虐待を起こしやすくなると考えられる。偽りの自己から回復する方法として、日記や出

版物などの執筆療法³⁸⁾、レタリング、自分を見つめなおす作業、カウンセリング³⁹⁾などがある。しかし、抑圧していた過去の感情を意識化するということは、大変難しい。そこで、一人ではなく、同じような仲間とともにグリーンワークを行う方法が一番効果的であると考えられる。

ハーマン¹⁶⁾は、「心的外傷を受けた人は、他者から離断して無力であるため、回復の基礎は有力化と他者との新しい結びつきを作ることである。他の人々との関係が新しく蘇る中で心的能力（基本的信頼を作る能力、自己決定を行う能力、積極的に事を始める能力、新しいことに対処する能力、自己がなんであるかを見定める能力、他者との親密関係を創る能力）を創り直す。」と述べている。その回復過程として、基本的には「安全」、「想起と服喪追悼」、「再結合」の3段階のプロセスがあり、その人の状態により様々なプロセスをたどると考えられている。虐待は長期にわたり、自己概念まで歪め、偽りの自己が確固たるものになっているため、どのようにして偽りの自己が回復していくのか、心が癒されるプロセスをハーマン⁴⁰⁾の3つの段階に沿って見てみる。

1) 偽りの自己からの回復

①第一段階：安全

ハーマンは第一段階で自分の問題を明らかにし、自分の力を回復させ、安全な環境を作ることが必要⁴¹⁾と述べている。偽りの自己として大人になった人は、現在でも緊張した人間関係の中にいることが多いため、まずは、物理的に安全な環境が必要である。そして、自分の事を心配してくれる安全な仲間にもたれ落ちて生活できるようになれば、自分自身に目を向ける余裕ができる。そうすると、生き辛さを感じていたのは自分のあり方に問題があったことに気づき、自分自身の問題に向きあうことができるようになる。

②第二段階：想起と服喪追悼

第二段階では、被害体験者が完全に、深く、具体的細部に渡って外傷のストーリーを語る段階であるとハーマン⁴²⁾は述べている。斎藤⁴³⁾は、「子ども時代の痛みや喪失が癒されることなく

過ぎて大人になった場合、その人の心の中には愛を求める子どもの悲嘆が住みつく。この子どもをインナーチャイルド（内なる子ども）と言い、彼らを癒す作業をグリーンワーク（悲嘆の仕事）と言う。」と述べている。インナーチャイルドとは、真の自己を表現できず、ありのままに受け入れられていないという点で、偽りの自己と共通すると考えられる。

この段階で自分自身を見つめると、家族の問題が見え始め、自然と過去の回想につながる。虐待の記憶は抑圧しているので、初めは過去の回想してもなかなか出てこない。しかし、同じような体験をした仲間の話聞きながらグリーンワークを行うと、自分の話を聞いて欲しいという感情が芽生える。そして、激しい怒りや悲しみが一気に噴き出す事が多く混乱するが、共感して聴いてくれる仲間がいて、辛かった過去の感情を皆で分かち合う（シェアリング）と、強烈な情緒的反応は次第と和らいでいく。そして、それはもはや「もう済んだこと」として「過去の記憶」になるとウィットフィールド⁴⁴⁾は述べている。つまり、虐待をうけた事実は決して消えることはないが、抑圧していた感情を再体験することで、それに対する囚われが消え、今までとは違った意味付けができるようになる。

③第三段階：再結合

ハーマン⁴⁵⁾は、外傷的な過去との和解を達成した人は、これからの人生に向けて、新しい関係を育てなければならないと述べている。斎藤⁴⁶⁾は、この段階を「人間関係の再構築」又は「エンパワメント」と呼び、自尊心が十分高まって、人に受け入れられることが信じられると、人に優しくなれると述べている。つまり、乳幼児期に親との間で基本的信頼関係が育っていない人も、信頼できる人との間で育ち直しをすることで、自分らしさ（真の自己）を獲得し、未来に向けて生きていけるようになる。

2) 自分らしく生きる

アダルト・チャイルド（AC）とは、元々アメリカでアルコール依存症の親の元で育った人（Adult child of alcoholics）を意味する。し

かし、その後、ACとは機能不全家族 (Adult child of disfunctional family) や感情を抑圧された家族の元で育った人達をも広くさすようになった。虐待を受けて育った人も、家族としての機能が果たされていなかったという点では、ACの概念に含まれると考えられる。『ACが人生を変えていく本』⁴⁷⁾ でACにとってのゴールの例として、「自己信頼」、「健康な境界線」、「対等なコミュニケーション」、「感情表現」、「親密な関係」、「セルフケア」、「柔軟性」を挙げている。黒川⁴⁸⁾は、世代間連鎖における親の問題点を挙げ、①精神的な安定、②自信、③本心が話せること、④精神的に落ち着いていること、⑤双方のコミュニケーションが取れることが必要であると述べている。斎藤⁴⁹⁾は、エンパワメントの要素として、①私の発見、②「自分」を肯定する、③傾聴する、④誠実である続ける、⑤自分の身を守る力、⑥自分がしたいと思うことに寛容になる、⑦過去の自分の力を発見する、⑧変化を楽しむ力、⑨選択肢を増やす、⑩切り捨てること、⑪「無意識」へと開かれた心、⑫自分の個性を信じる力、⑬変化を続けることと述べている。

以上の文献の解釈から、以下のことが明らかになった。まず、自分に対する自信が生まれてくるには自由に自己表現が許される安全な場と受け入れが必要であること。次に、このような自己に対する自信は他者との関係の信頼につながり、この人間関係の中で自分の感情を素直に表現できるようになれば、「過去の自分」と「変化した自分」を含めたありのままの自分を認めることができるようになることが分かった。

これは普通に生きてきた人にとってはなんでもないことである。しかし、今まで「偽りの自己」として生きてきた人にとって、自己信頼・自己表現・自己受容・他者信頼ができるようになることが、真の自己として自分らしく生きることであり、このためにはありのままの自分で行われる場と受容してくれる人の存在が不可欠と言えよう。

IV. 結 語

乳幼児期に虐待を受けると基本的信頼関係の欠如、低い自己評価、自己概念の歪み、高い攻撃性・衝動性、PTSDなどの情緒的影響を受ける。そのため、攻撃者との同一化と復讐、役割逆転という防衛機制により、自分が受けた虐待と同じことを繰り返す世代間伝達が起こると考えられる。

しかし、乳幼児期に虐待を受けても、周りに信頼できる人がいて、自分の被虐待体験を語ることができれば、虐待を繰り返さなくてすむとされている。そこで、偽りの自己として生きてきた人も、安全な環境で同じような体験をした仲間と共にグリーフワークを行い、抑圧していた自己の感情を再体験してシェアリングを行い、偽りの自己を回復させることで、他者信頼・自己信頼・自己表現・自己受容ができ、自分らしく生きることができるようになる。

今回は、文献を元に検討を行ったため、偽りの自己が回復する過程を検証してはいない。そこで今回は、実際に偽りの自己として生きてきた人が仲間とともにグリーフワークを行い回復していく過程を質的に調査し、明らかにしたい。

文 献

- 1) C. Henry Kempe, M. D., Denver, Frederic N. Silverman, M. D., Cincinnati, Brandt F. Steel, M. D. 他 : The Battered-Child Syndrome, Journal of the American Medical Association, 181, 105-112, 1962
- 2) 佐竹良夫 : 小児の虐待 - Battered-Child Syndrome, 小児科診療, 34(2), 89-93, 1971
- 3) 宮園久栄 : 児童虐待についての調査研究の外観, 萩原玉味, 岩井宣子(編) : 児童虐待とその対策, 118-164, 多賀出版, 1998
- 4) 池田由子 : 児童虐待の病理, 日本医師会雑誌, 103(9), 1464-1474, 1990
- 5) 池田由子 : 乳幼児虐待とその背景, こころの科学, 30, 52-58, 1990
- 6) 池田由子 : 虐待する者の病理, 小児外科, 26(4), 468-472, 1994
- 7) 松井一郎 : 虐待される児の病理, 小児外科,

- 26(4), 473-479, 1994
- 8) 広岡知彦：見え始めた，児童虐待（親子関係ハンドブック＜特集＞－親子関係の病理），児童心理，48(18)，94-100, 1994
- 9) 斎藤学：子どもの愛し方がわからない親たち，108-131, 講談社，1992
- 10) 岩井宜子，内山絢子，佐藤典子，他：児童相談所で扱った児童虐待の実態調査，前掲3)，5-61,
- 11) 西澤哲：子どもの虐待，19-53, 誠信書房，1994
- 12) D. W. Winnicott (牛島定信訳)：情緒発達の精神分析理論，170-189, 岩崎学術出版社，1977
- 13) 前掲11), 68-79
- 14) Steel, B.F.: Notes on the lasting effects of early child abuse throughout the life cycle. Child Abuse Negl., 10, 283-291, 1986
- 15) Hunter, R. S. & Kilstorm, N.: Breaking the cycle in abusive families., Am J Psychiatry, 136, 1320-1323, 1979
- 16) Judith Lewis Herman (中井久夫訳)：心的外傷と回復，205-240. みすず書房，1996
- 17) 児童虐待の防止等に関する法律，平成12年5月24日公布，法律第82号，衆議院HP
- 18) E. H. Erikson (仁科弥生訳)：幼児期と社会，みすず書房，317-322, 1977
- 19) R. D. Laing (志貴春彦・笠原嘉共訳)：自己と他者，116-128, みすず書房，1975
- 20) 前掲19), 152-165
- 21) 村瀬嘉代子：児童虐待への理解その3，児童養護，28, 44-47, 1998
- 22) 郭麗月：被虐待児と親の行動特性とその由来，小児看護，20(7)，881-885, 1997
- 23) 前掲11), 27-53
- 24) 信田さよ子：なぜ，「良い子」が問題か－「良い子」を生み出すおとなたち，児童心理，53(17)，1-10, 1999
- 25) 三池輝久：「良い子」のストレスと疲れ，児童心理，53(17)，38-43, 1999
- 26) Alice Miller (山下公子訳)：＜新版＞才能のある子のドラマ－真の自己を求めて－，14-21, 新曜社，1996
- 27) C. L. Whitfield (斎藤学監訳)：内なる子どもを癒す，14-27, 誠心書房，1997
- 28) 渡辺久子：虐待の世代間伝達を断ち切る，助産婦雑誌，52, 674-680, 1998
- 29) 前掲11), 71-79
- 30) 池田由子：児童虐待－ゆがんだ親子関係－，152-166, 中公新書，1999
- 31) Alice Miller (山下公子訳)：魂の殺人－親は子どもに何をしたか－，139-184, 新曜社，1983
- 32) 斎藤学：アダルト・チルドレンと家族，46-78, 学陽書房，1996
- 33) 前掲31), 117-131
- 34) 村瀬嘉代子：児童虐待への理解その4，親へのアプローチ，児童養護，28(4)，40-43, 1998.
- 35) 前掲26), 8-13
- 36) Joan Kaufman and Edward Zigler, PH. D.: Do abused children become abusive parents?, Amer J Orthopsychiat., 57, 186-192. 1987
- 37) 前掲16), xii-xvi
- 38) J. K. Stettbacher (山下公子訳)：こころの傷は必ず癒える，93-113, 新曜社，1993
- 39) 前掲32), 182-208
- 40) 前掲16), 241-339
- 41) 前掲16), 241-272
- 42) 前掲16), 273-307
- 43) 斎藤学：魂の家族を求めて，138-151, 日本評論者，1995
- 44) 前掲27), 157-174
- 45) 前掲16), 308-339
- 46) 斎藤学：心の内の子どもと出会う，170-205, ヘルスワーク協会，1998
- 47) アスク・ヒューマン・ケア研修相談室：アダルト・チャイルドが人生を変えていく本，110-127, アスク・ヒューマン・ケア，1997
- 48) 黒川昭登：インナーチャイルドの癒し，154-179, 朱鷺書房，1997
- 49) 斎藤学：心の傷の癒しと成長，186-230, IFF 出版部ヘルスワーク協会，1999